

2023 年度自己評価・関係者評価

学校法人琴似キリスト教学園

認定こども園琴似教会幼稚園

1. 教育理念・教育目標

保育の理念

- ・キリスト教の精神に基づいて一人ひとりの個性を大切に子どもたちの心身を育て「共に生きる喜び」を伝える。
- ・聖句『光の子として歩みなさい』（エフェソの信徒への手紙 5 章 8 節）

保育目標

- ・神さまに愛され守られていることを知る
- ・自分らしくのびのびと表現する
- ・自分のこともみんなのことも大切に思う

2. 2023 年度の重点目標

- ① 神さまに愛され守られていることを知り、安心して過ごす。
- ② 自分の好きな遊びを見つけて友だちや保育者とじっくり遊び込むことが出来るよう、保育者の関わり方・遊びの内容・環境構成に十分な配慮と計画性をもって保育を行う。
- ③ 園児と職員の健康と安全を守る体制の構築を目指し、適宜見直して対応する。
- ④ 長時間の保育を受ける子どもへの必要な援助を行うとともに、園全体が安心感と親しみをもって相互に関わることのできるよう温かい雰囲気を作り出すよう努める。
- ⑤ 日常の様々な場面で、互いの気づきを伝え、尊重し合い、共に助け合いながら保育の目標に向かっていくための組織作りや効果的な会議と園内研修に取り組む。

3. 取り組みと評価

区分	評価項目・内容	評価	取り組み状況
教育・保育目標	園の建学精神や教育・保育目標の理解	4	認定こども園教育・保育要領の内容の理解を深めていけるよう学ぶと共に、建学の精神や保育目標について職員全体の研修を年度当初に行い、理解の一致に努めた。目標に向かってのねらいの設定を実践と学びの繰り返しの中で見直ししながら進めた。
	認定こども園教育・保育要領の理解と、子どもの実態に即した目標の設定	4	
	目標は前年度の反省を生かしているか	4	

	<p>目標は社会の要請や保護者の願いを反映しているか</p>	<p>4</p>	<p>目標を掲げることは難しいものの、少しずつ前進させている。保護者との信頼関係が出来上がる中で、目標と保護者の願いの一致を確認する事ができた。</p>
	<p>乳児期の園児の教育と保育は、その特性に合わせて、適切に行われているか</p>	<p>4</p>	<p>【健やかに育つ】 一人ひとりの成長や発達に合わせた環境作りを心掛け、できたことを一緒に喜びながら見守り続けた。食事も保護者とこまめに話し合うことで、個々に合わせた離乳と食事提供を実施する事ができた。</p> <p>【気持ちを通わせる】 保育者と子どもの会話や遊びの中に自然と歌やわらべ歌、手遊びがあり、ふれあいの場面を多く持っていた。</p> <p>1対1の関わりを多く持てたが、初めて乳児に接する職員は言葉を発しない子どもに応答的な関わりをすることの難しさに直面する場面も多かった。しかし、担当する職員間で理解を深めるよう話し合う機会を多く持ち、基本的な信頼関係を育むように努めた。</p> <p>【感性が育つ】 戸外での活動は様々な物に興味を持って関わる事ができた半面、室内では五感を刺激したり手指を使う玩具を成長に合わせて用意する事は不十分ではあったが、保育者が工夫して手作りしたり、子どもの成長発達に沿って環境を整え、身近なものへの興味や関心を引き出せるよう心がけた。自然物を使って子どもと一緒に室内の飾りを作るなど前年に比べて少しずつ充実してきている。</p> <p>【全体として】 個々の気持ちに寄り添い、生活リズムに合わせた保育ができるようになってきた。乳児期の個人差の理解や成長の見通しは難しく、基本的信頼関係の中で安心・安全な保育ができるよう丁寧な保育に努めている。精神的発達に必要な身近な物の環境作りはまだまだ不十分ながら、少しずつ整備を進める事ができた。</p>
	<p>1歳から満3歳未満の園児の保育はその特性に合わせて、適切に行われているか</p>	<p>4+</p>	<p>【健康】 心地よく過ごすことを一番に日々の繰り返しの中で生活リズムが整うよう根気よく関わることに努めた。子どもの自分でやりたいという気持ちを尊重して見守ったり援助しながら、できた時の喜びを一緒に喜び、温かい雰囲気の中で安定して過ごせるようにした。特に、それぞれの子ども達の生活、成長を理解して声掛けや援助の方法を考えていった。</p> <p>【人と関わる力】 子ども同士の関わりが少しずつ増えて</p>

		<p>いく中で、声のかけ方やかかわり方に悩むこともあったが、まずは一人ひとりを理解することを大切に保育者間でもよく話し合うようにした。どんどん広がっていく子ども同士の関わりを更に展開していけるよう、時期や成長に合わせた仲立ちや援助の仕方を模索しながら、小さな成長を保育者間で共に喜び合うことで、穏やかな雰囲気の中で生活できるよう心がけた。</p> <p>【環境に関わる力】安全管理や確認を怠らないよう努めたが、小さな見落としや気づきに欠けた部分もあった。保育者自身が身の回りのものの性質を知ったり感覚的な遊びや探索活動への不慣れもあり、室内環境や遊具玩具の設定に試行錯誤しながらの取り組みであったが、子どもと一緒に新鮮な気持ちで喜び合えた事は良かったと思う。今後は子どもの状態に合わせて適宜玩具を出し入れするなど細やかに整えていきたい。</p> <p>【言葉】優しい表情や口調の声掛け、心地良いリズムの言葉を使うなどを心がけた。子どもに伝わる言葉かけの難しさを覚える事もあった。イメージを膨らませるような言葉かけは、保育者の感性によるところも大きく、気持ちにゆとりを持つことの必要を痛感した。絵本に登場する人物や動物の真似っこ遊びを楽しむ姿が多くみられる。言葉のリズムが面白い絵本は何度も繰り返して遊ぶことができた。質の高い絵本に多く親しむことで言葉の豊かさの基礎を養えるようにしていきたい。</p> <p>【表現】近所の公園への散歩では空から舞い落ちる葉っぱ、珍しい形の雲、美味しそうな匂いなどに心躍らせ体も動かして自分が感じたイメージを表現するなどの姿が見られた。様々な方法で表現するための土台作りの時期に、子どもの内側から発せられる表現を大切に受け止め、豊かな経験をする事の大切さを目の当たりにした。好きな曲に合わせて体を動かして遊ぶことも繰り返して楽しむことができた。今後も、その時々子どもが何に興味を示しているのかを十分に受け止め、子どもの表現欲求が満たされるような柔軟な保育が出来たらと思う。</p> <p>【全体として】保育時間の長い小さな子ども達が1日を快適に過ごし、安定した気持ちで健やかに成長していけるよう、細やかな配慮と工夫の中でゆとりある保育を進めるよう心がけた。しかし、複数の保育者が関わること</p>
--	--	--

		<p>で理解のずれが生じやすい面もあるため、担当保育者間で話し合いの機会を昨年以上に増やすし、こども一人ひとりへの理解や対応の仕方の一致に努めた。その成果が少しずつ現れてきている。</p>
	<p>満3歳以上の園児の教育と保育は、その特性に合わせ、適切に行われているか</p>	<p>4-</p> <p>【健康】子ども一人ひとりの気持ちの安定を土台として意欲的で健康な生活が作り出されていくことを踏まえ、何よりも子ども達の気持ちの安定に努めた。進級児・新入園児・他園からの転入児がいる中で一人ひとりが自分の居場所として園生活を獲得できるよう一人ひとりに合わせた丁寧な対応を心がけた。感染症の状況に合わせて都度手洗いの仕方の確認を繰り返したり、熱中症対策など、子どもが自ら気を付けて取り組めるようになってきた。</p> <p>【人と関わる力】集団での生活がうまくいかない機会に、きまりを確認したり、自分達できまりを考えたり改善しようとする姿が見られた。言葉で伝え合ったり、関わりを深めながら思いやる経験の一つひとつが子ども達の成長に繋がった。年長児ともなると園全体を巻き込んだダイナミックな活動（動物園作り）に取り組んだり、乳児の保育室に少人数で出向いてお世話したり運動会の練習を手伝ったり、一緒に遊ぶなどの経験もできた。今後もこども園ならではの関わりの機会を大切にしていけたらと思う。</p> <p>【環境と関わる力】自分の身近な環境にその子なりの興味や関心を示す姿を大事に見守ってきた。生活に必要な数・時間や様々な表示などが規則性をもって美しく整えられているか、日常生活に使う道具や絵本や遊具がきれいに整えられているか等、見逃しがちな日々の環境整備が不十分であったように思う。又、保育者自身が物を大切に扱う姿勢に欠けていたことも否めない。身近な部分での環境整備に力を入れて整えていきたい。自然環境への関わりは大きな公園だけでなく近隣の公園によく出かけ、小さな発見も多く身近な草花のほか、木の実やキノコや虫などの子どもの発見を生かして楽しい活動がたくさんできた。</p> <p>【言葉】豊かな言語体験の積み重ねが一人ひとりの力になるよう、話を聞いたり、聞いて理解してイメージを膨らませたり共有できるような経験を大切にしている。郵</p>

		<p>便ごっこその他、工夫して伝えようとする活動が多く見られた。拙い表現であってもその思いを大切にくみ取ること、言葉や色々な方法で伝え合う力を育てると共に、集中して聞いたり理解する力が育つよう取り組んでいる。年少児では自分の思いを人にわかるように伝えることが難しいこともあるが、子どもの思いに寄り添い、耳を傾けていきたい。絵本に親しんだり素話に触れる機会は継続していきたい。</p> <p>【表現】子どもの心が弾むような生き生きとした体験であっても、実際の表現としては素朴でわかりにくい事も多いが、表現する喜びや創り上げる楽しさが感じられているかどうか、何を表現したいのか等、子どもの様子をよく観察して一人ひとりの表現を理解できるよう、難しいながらも心がけてきた。イメージはあっても表現しきれない部分を少し手伝ったり一人ひとりに合わせて援助しながら、表現する喜びを十分に味わえるよう今後も保育者として向上していきたい。</p> <p>【全体】自分らしさを発揮して意欲的に活動するための保育者の関わり方に試行錯誤しながら、保育に取り組んだ。保育者は子どもと一緒に驚いたり喜んだりする中で、個々の気持ちをくみ取りながら、他者と自分の違いを認め受け入れ合いながら集団としても育っていけるようその時々に応じて援助する一方、子ども理解の難しさも痛感させられた。目の前の子どもが出している沢山のサインに気づき、的確に理解し、見通しを持った計画のもとに柔軟な保育ができるよう更に努めていきたい。</p>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">教育・保育実践の配慮</p>	<p>乳児期の配慮</p>	<p style="text-align: center;">4</p> <p>保護者との信頼関係を第一に乳児の保育を開始した。戸惑うこともあったが、一人ひとりの状況をよく理解し、その時々の子どもの細やかな観察や具体的な場面での伝え漏れが無いようするなど細心の注意を払った。経験のある保育者だけでなく経験の浅い保育者も一緒になって相談しながら保育を進められたのは良かった。</p>
	<p>1歳以上満3歳未満の配慮</p>	<p style="text-align: center;">4</p> <p>関わる保育者の数が多かったことで保育観の一致や、情報の正確な伝達、具体的な場面での保育方法の統一が難しかった前年に比べ、毎月のクラス毎の保育会議が充実してきたことで、保育者間での情報や意識の統一ができるようになってきた。保育者の個性の違いはあるものの一致して受容的な態度で子どもと関わる事ができた。</p>

	教育・保育全般の配慮	4	こども園は一人ひとりの違いを受け止め、互いに認め合えるような小さな社会でありたいと願う。一人ひとりの様子をよく観察し小さな変化も保育者間で共有しながらじっくりと関わるようにした。穏やかで安心感のある雰囲気になるよう環境設定にも配慮した。
健康・安全	健康支援	4	様々な感染症対策への取り組みは、年間を通して正しい理解、正確な情報収集や保護者への情報の周知と協力依頼の繰り返しの中で対応してきた。その中で保育者自身が学ぶ機会も多く、より専門性を高めることの必要に迫られる場面もあった。細やかな健康観察と衛生的な環境の確保、保護者との連携などにも努めていきたい。園全体で健康増進や疾病安全対策の意識を高め積極的に対策に取り組みたい。その中で園独自に嘔吐処理の動画を作り職員の理解を一致させる工夫など新しい取り組みができた。
	食育の推進	4	日々の給食の説明にも知恵を絞り保護者にも興味を持ってもらえるような伝え方が出来たことは良かった。子どもが給食のメニューやレシピに興味を持ち家に持ち帰ることを喜ぶ姿が見られた。親子クッキングや保護者の給食試食会など新しい活動も取り入れた。食育活動や行事の折のちょっとしたクッキング等、楽しい経験の積み重ねが子どもの育ちにしっかりと生かされるよう今後も工夫を重ねていきたい。
	環境衛生管理・安全管理	4	様々な環境整備や安全対策について、気づいた段階で取り組んできたが、危険予知や改善の迅速さについて課題が残る。迅速に対応できるよう園内の協力体制と意識の向上に努めたい。不審者対応・不適切保育・送迎事故・熱中症・プライベートゾーンの意識など周囲の目が厳しくなる中、子どもや保護者と共に協力して情報を伝え合ったりできればと思う。救命救急研修や安全管理の研修参加が充実していたので、園内で演習を繰り返すなどして適切な実践に繋がるようにしていきたい。

	災害への備え	4	大きな災害に見舞われた際の非常災害対策計画書の完成と安全対策の再構築、本番に繋がる訓練の不足を感じている。個々の役割分担を全員が理解して即座に対応するための準備、防火扉の扱いの訓練、非常持ち出し品の整備等対応についてやや遅れがある。地域の防災訓練への参加などは積極的に参加すべく、町内会に申し出ていきたい。
子育て支援	子育て支援全般	4	地域の関連機関との連携は前年よりも少し強化されてきた。今後も、社会の中で子育てが円滑に行える環境作りに貢献していきたい。 保育時間が長かったり懇談会等に参加しにくい家庭への配慮に努め、保護者が前向きに子育てをしながらも社会で活躍できるよう、時間の調整など具体的な手だてを工夫している。子どもの成長を保護者と園とで一緒に喜び合える関係性を大事に育んでいきたい。
	園児への子育て支援	4	保護者の保育参加（絵本の読み聞かせ）を再開させることができたが、一部の保護者の参加に限られているので、認定こども園としてどのような形での保育参加ができるのかを検討し、実現に向かっていきたい。外国籍だけでなく人種や言語・文化の違いに対応できるよう実態に合わせて支援してきたが、言葉の壁を超えることは難しく、今後日本で教育を受ける子どもが小学校教育に適応しうる日本語の獲得に向けて、家庭との連携だけでなく保育者間の一致も必要と考える。 実態に応じた支援ができる施設であるよう学びつつ前進していきたい。
	地域における子育て支援	4	以前から行っている「にじいろサークル」（メンバー固定）と「子育て広場」（都度募集）は形を変えながらも継続し、子育て相談の良い機会とすることができた。相談を希望して参加する保護者も増えてきているので、活動後に時間を取ってゆっくりと話ができる体制を取っている。一時預かり事業は乳児の一時預かりの希望が増えてきているが、人材確保の面から3歳児以上に限定せざるを得ないのが現状。関連機関との連携は必要に応じて連携し、相互に信頼できる関係を築いていきたい。

資質向上	職員の資質向上	4	質の向上に向けて、開園2年目となった今年も試行錯誤が続いている。職員会議にワークショップを取り入れて出席者全員が受け身にならないような工夫を重ねてきた。調理部門では調理員の経験の差が大きいため、経験の浅い職員を中心に必要な技術の向上が課題として残る。保育者自身の自己評価では、自身を振り返り、前向きに保育に取り組むことが自己実現に繋がることを願う。一方、園全体の自己評価が、保育の質の向上につながるよう日々の記録・振り返りと改善・計画の練り直しなど、忍耐強く組織全体での強化を図りたい。
	職員研修	3+	時間の確保や参加者の調整など昨年に比べて改善されてきた。園の教育保育方針の浸透、具体的課題への取り組みのためにも、園全体で研修の内容を共有し、学びを実践していくための仕組み作りが必要と思われる。せっかく受講した研修が、個々の質の向上のみならず、園全体の保育の質の向上に繋がるような手だてを考えていきたい。 テーマを持った公開保育を行い小学校教員等との意見交換や札幌国際大学から講師を招いての保育研究を継続できたことは大変に良かった。
総合	<p>こども園開園2年目を迎えようやく体制が落ち着いてきた。 「一人ひとりの子どもの豊かな育ち」と「大人も子どもも共に支え合い育ち合う」との基本姿勢を崩すことなく歩むことが出来たのは、仕事を通して与えられる喜びの大きさと、職員の努力と、各々の人間性をもって支え合おうとした結果であると思う。職員の意思統一と協力体制の強化は昨年からの課題であったが、職員会議の方法を伝達中心からワークショップ中心へと切り替え、相互に伝え合い、個々の職員が意見を出し合える環境が少しずつ整いつつあるので、今後更に充実させていきたい。</p> <p>日々の保育に真摯に取り組む、保護者との信頼関係を一層深め、常に保育の見直しや改善を積み重ねていきたい。年度途中に入園する満3歳児の受け入れ態勢の整備と、安全対策と、保育の質の向上に関わる様々な課題に取り組んでいる。研修の機会を増やすことは出来たが、その成果を園全体の保育に反映させるための具体的な工夫が必要と感じている。</p> <p>キリスト教保育の原点を見失うことなく、見えない守りと導き、多くの支えに感謝しつつ、専門性を高めながら、常に見直しや改善を行い、子ども・大人・園全体がゆっくりでも確かな希望を抱いて成長し、歩み続けていきたい。</p>		

5. 関係者評価委員会の総合的な評価

関係者評価実施：2024年2月8日(木)

結果	評価の理由
4	<ul style="list-style-type: none"> ▪ 保育目標の設定にあたり、年度末の保護者アンケートの結果を反映して保護者が安心感を持って子どもを通園させられるための改善を行っている点が評価できる。具体的には1号子どもの預かり保育の利便性向上、行事のお知らせを早めに行うなど細部に渡るようだが、保護者の声に耳を傾け、常に見直し改善しようとする姿は今後も大切にしてほしい。丁寧な情報発信と対面での伝え合いを一番大切にして保護者の心の声に耳を傾けようとする姿勢を評価したい。 ▪ 保護者のための講演会や親子クッキング等、コロナ対策のためにできなかった事を計画・実施できた点は良かった。保護者間の交流が希薄になりがちだが、園と保護者だけでなく保護者間の繋がりも大切なので、相互理解の中で保育目標が達成できるよう更なる前進を目指して欲しい。 ▪ 給食の提供に関して、アレルギー食の配膳ミスや食べ物を口に詰め過ぎる等、大事故に繋がりにかぬない事を日々のチェック体制の強化や迅速な対応によって防いできたとの報告を受けた。命を預かる責任の重さの実感が日常の保育の丁寧さに繋がっていると思われる。ヒヤリハットを有効に活用して今後も安全安心な保育を続けて欲しい。 ▪ 不適切保育が社会問題となっているが、経験の浅い保育者が追い詰められたり、ある程度熟練した保育者が慣れで保育するようなことがあってはならない。園全体の先生たちの明るさと緊張感のバランスがとても良い事は、保育の様子から伝わってくる。協力し合える関係性をこれからも維持して欲しい。 ▪ 職員研修・乳児保育・幼児の保育の自己評価が、昨年よりも少し上がったとの事だが、自分達の取り組みの成果が実感できるのはとても大切で、次の意欲に繋がると思う。自己評価は若い人ほど高く経験を積むほど低くなる傾向にあるが、思いを一致させるためにワークショップ等の新しい試みをしている点は良いと思う。次につながる自己評価ができていることを関係者としても認め、全体の評価を4とする。 ▪ こども園に移行して2年目の今年は、土台固めの大事な1年であったと思う。常に自分達の保育を振り返り、時代や社会のニーズに柔軟に対応しながら、何よりもまず目の前の子ども達を大切に、保護者の思いや願いを酌み取り、キリスト教主義のこども園に相応しい思いやりと優しさをもって歩みを進めて欲しい。